

平成 25 年度第 2 回平塚市博物館協議会会議録

■開催日時 平成 25 年 9 月 4 日（水）10 時～11 時 30 分

■開催場所 平塚市博物館特別研究室

■会議出席者（敬称略）

会 長 牧野 久実

副会長 宮川 重信

委 員 石綿 進一、猪俣 秀、熊澤 武彦、椿田 有希子

事務局 澤村館長、縣館長代理（管理担当長）、栗山主管（学芸担当長）

■傍聴者 2 名

■会議の概要

1 開 会

館長挨拶

2 議 事

(1) 報告事項

- ・夏の開催行事について
- ・規則改正と教育委員会点検評価について

(2) 今後の事業予定等

- ・次期特別展について

(3) その他

■議事および質疑

議題(1)「学芸担当からの報告事項」で、夏に開催した 7 月・8 月の行事について、事務局栗山学芸担当長から、協議会説明資料により説明。

委 員 夏休みに博物館を核として、美術館・図書館と三館が連携してうまくいったということで、良かったと思います。民家の紙芝居の内容ですが、平塚にまつわる歴史的なものなのか、一般的な民話的な紙芝居なのか、内容が分かれば教えてください。

事務局 内容としてタイトルの資料は用意していませんが、一般的な紙芝居、一般的なお話です。美術館で展示している絵本作家の方が作られている民話の紙芝居がありまして、それを図書館から借りて上演しました。上演者は、炉端話を毎月やっていただいている大貫さんという市民ボランティアの方にやっていただきました。

紙芝居のイベントは、三館のコラボレーション事業のなかでも、美術館で開催している絵本展に合わせた内容になっています。絵本展に協力したイベントとして博物館でどんなことができるかということで、民家という展示の一コーナーを一つの装置として利用しました。絵本というのが本筋なのかもしれませんが、絵本ですと大勢の方にお見せするにはちょっと小さいということで、紙芝居を使ってイベントをやっていただいたという内容です。

委 員 図書館で、平塚にまつわる歴史などの民話は何か残っていないのですか。子供たちに、

平塚にはこういう民話、こういう話があるよと、引き継いでいくというのも、とても大事だと思うのですが。一般的な民話も大事ですが、今どんどん変わって消えてしまうので、平塚で言い伝えられている民話を子供たちに引き継ぐという捉え方も大事なと思いますが、そういうものはないのですか。

事務局 平塚にまつわる民話というものは炉端話のなかで語っていただいています。そちらは紙芝居として製作していないので、語りになってしまいますが。

委員 子供の割合が随分増えたこと自体は喜ばしいことだと思うのですが、一つ心配なのは、遺跡という展示が小学生や中学生には若干難しいのではないかと思います。アンケートが集計中ということですが、お分かりになれば結構ですので、小学生や中学生からどういう声が寄せられたのかということと、展示の中でそういった層に向けて何か分かりやすいアピールなどをされたのかどうか、おうかがいできれば。

事務局 アンケートをこれまで見たなかでは、小学生・中学生の意見として「難しい」という意見はかなりあります。ただ一方で、平塚にもこんなにいろいろなものがあつたのか、教科書の写真でしか見たことがない、それが本物がこんなにあるのか、という驚きもあります。やはり小さいうちは、中身が何かというのは分からないかもしれないけれども、実物を見たという印象というのも大切などころかなと考えています。それに対して、物だけが並んでいるのでは取っつきにくいという部分に関して、こちらのワークシートを社会教育課が用意して特別展示室の入口に置きました。展示の中で面白いものを探してみようということで、この四つの資料がどこにあるのか展示室の中で探してみようというワークシートと、鹿の絵を描いた土器の鹿のモチーフをベースにして、そのまわりに自分のイメージを描いてみよう、という二つのワークシートを用意しました。アンケートのなかで、子供さんと一緒に来られたお母さんの意見として、「子供がゲーム感覚で楽しそうに展示室の中を探し回っていた」、「非常に良かった」という意見もあります。ワークシートの用紙も無くなるくらいの人気でしたから、今後も、子供さん向けにもう一つ工夫したものをできるのではないかと考えています。

委員 難しいことを無理に分かりやすくする必要はないのではと常々思っているのですが、興味を持ってもらうきっかけを提供することがとても大事だと思います。今後とも、ぜひそうした試みをしていただければと思います。

委員 実物の迫力というのはやはりすごいと思います。特にお子さん方にとってはインパクトが大きいと思っていて、その意味ではすごく良い展示だと思います。点数が多いようですが何点ぐらいですか。すごい数だと思うのですが。

事務局 1500点です。

委員 すごいですね。今、子供たちはデジタルの世界と接することが多いので、確かに難しい内容だと思うのですが、ああいう実物を直接見られる機会はすごく貴重だと思います。

委員 今の大人と子供のこともありますが、地域で言うと、平塚でもこの地域は伊勢原・秦野などに近く、遺跡自体もいろいろな地域でかなり知名度があると思うのですが、市外の参加者と市内の参加者という統計は出ているのですか。

事務局 入館者数のみです。

委員 市外の人随分いたのですね。

事務局 多かったです。入館者数は入口の出入りでカウントするので、市外の方か市内の方か分からないのですが、アンケートのなかで、お住まいの地区が市外とか県内とか、

丸をつけていただくところがありますので、アンケートではある程度分かります。

委員 文化ゾーンの三館コラボというのは本当に素晴らしいと思います。以前から時々こういうことはされていたと思うのですが、やろうと思ってすぐできることではないですし、手間からすると、単発の一館で企画などをするほうが手間は省けるので、結構大変だと思うのですが、やはり日頃からの連携をやっておかないと、こういうことをいきなりやりますよというわけにはいかないと思います。日頃どういう風な連携の取り方をしていらっしゃるのか、おうかがいしたいと思ったのですが。

事務局 日頃から特に決まったやり方で会合を持つとかはしていません。ただ、三館コラボについては続けていこうということで、三館で共通の認識は持っています。委員のご指摘の通り、何回か回を重ねていますし、そろそろ話し合いの時期だねということはそれぞれが承知していて、だいたい決まった時期に、今年は何をしましょうかという話し合いを持つような形で行っています。

委員 とても素晴らしいことですね。

事務局 ありがとうございます。

委員 もう一点、イブニング・ミュージアムなど、夜の5時以降にかぶさるイベントが結構多いと思うのですが、こういうお仕事に関わる学芸員さんや職員さんは、例えば昼からのシフトというようなことになるのでしょうか。そういう負担についてどのように考えられているのか、うかがいたいのですが。

事務局 職員体制については時間外対応という形でやっています。フレックス等を活用するという話もありますが、各分野の担当学芸員が、天文を除きますが、一人という形なので、穴をあけるわけにはいかないということがあります。とくに夏休み期間中、朝からお子さんも見えますので、それに対応できないと問題であろうということで、イブニング・ミュージアムは期間も限られていますので、時間外対応という形にさせていただいています。管理担当は当番で残る形です。学芸担当もそれぞれのジャンルでイベントを組んでいますので、基本的にその担当が残って、あとサポートするという体制をとっています。

委員 問題がなく、ということですね。

事務局 今のところはありません。

委員 時間外の対応ということですが、研究機関や博物館など皆そうでしょうか、かなり時間外にやるような部分が多いと思います。研究に係るものについては、かなり個人的にバラバラだったりしますが、確かにイベントなどについては、しっかり予算措置があると思うので、敢えてお聞きしますが、今はかなり外部の視点も厳しいので、その辺はしっかり対応しているのだなと思っています。とくに研究機関の場合はある意味で未払いだったりということがあったりするのではないかなと思いますので、その辺を十分しっかりやってほしいと思います。

事務局 学芸員個人の研究の部分と館の活動について、どこで線引きするのか非常に難しいという部分があり、常に話題になっています。現実問題として確かに線引きできていないのですが、ここまではいいよ、悪いよとかっきり決められない部分があり、その辺をどうしていくのかというのが課題として残っています。一つは館の活動の方向性として直接的に結びつけられるものが研究結果にあるのかどうか、ということが判断基準になると思うのですが、ではほかの部分で、直接というのはどの程度か、時間が経ったら駄目なのか、実際に研究というのは何年後に実を結ぶというものもあり、今の時点で判断で

きるのかどうか、課題が残っているところです。

事務局 職員の管理の話になってしまいましたが、博物館として、博物館はこういうことをやっていくんですということを、外ばかりでなく、内にもきちんと確認する、こういうことを目標にやっていきましょう、ではそれに対してこの研究はどういうことに役立つのか捉え直しながらやっていきましょう、ということを確認しながらやっていく体制を作っていかなければならないな、そういうことを進めていく必要があるなど、館長としては考えています。

委員 今のことに関して、単純な話かもしれませんが、学芸員さんの個々のお名前を前面に出すことが大事ではないかなと思います。ホームページなどを拝見して、ここではどういう学芸員さんがどういうことをやっているのだろうということを調べようとした時に、あまりお名前が出てこなかったり、どういう分野があるかは分かって、じゃ誰かという、その学芸員さんの顔が見えにくいというところがあるかなと思ったりしています。

委員 要望になりますが、真田・北金目遺跡群は夏期特別展ということで、とても良いと思うのですが、規模を縮小して結構ですので、ぜひ常設という部分でやっていただけるといいなと思います。学校の行事でなかなか難しいので、例えば6年生が歴史の学習で見ることができれば、平塚市の貴重な教材になると思います。難しさもあるかもしれませんが、一か所に残していただいて、学校に合わせて、また来年、再来年と、子供たちの学習に役立ててもらえるといいなと思いますので、よろしくお願いします。

事務局 この真田・北金目遺跡群の資料の今後の活用については、管轄が社会教育課の文化財保護担当というところになります。ですので、その辺について、こういうことを博物館としては申し上げられないのですけれども、現在の常設展示でも社会教育課から資料を借りてきて展示を構成しているものがあります。博物館としても活用をはかっていきたいとは考えています。

委員 こういう声があったと、ぜひ社会教育課にお伝えください。

委員 この前、北金目の歴史について公民館で展示をしたことがありますね。金目公民館の場所は中心地ですので、ロビーも大きくて、展示発表も、その後だいの期間、壁面やボードを使って展示していましたので、かなり活用ができるのではないかと思います。そうすれば、金目公民館に行けば展示されているよ、というようなことができるのではないかと思います。

事務局 その辺のご指摘・アドバイスについても社会教育課に伝えます。

委員 よろしくをお願いします。

議題(1)「管理担当からの報告事項」で、規則改正と教育委員会点検評価について、事務局縣管理担当長から、協議会説明資料により説明。

委員 評価のことですが、目標値の設定というのは今後考えておいたほうがいいでしょうね。「そういう評価じゃないんだ」ということはとても良く分かるのですが、たぶん今後ますます必要になってくるかもしれないと思います。

事務局 実際に、去年の事業仕分けのなかでのご意見、今回のアドバイザーさんからの点検評価という形で出てくるご意見の傾向は似ているところがあるように思います。あまり関

心の薄い博物館についてどう切り込んでいいのかとなりますと、どうしても一般的なご意見になってしまうのかなと思います。

委員 内容にあまり関心がないのかもしれませんが、逆に言うと、考えようによっては、設定の仕方ですら結構簡単に説得ができてしまうという部分があるかもしれません。

事務局 それ以上踏み込むことができるかどうか、という部分があると思います。ただ、事業仕分け、点検評価のやり方も毎年変わってきています。今回の教育委員会の点検評価会議も、重点項目という形で事業をピックアップしたなかで重点的に行ったり、行政評価、事業仕分けも、予算事業としていくら以上の予算を使っているものについて行うというようになっています。今回の平塚市の事業仕分けは、外部の評価人に頼むのではなくて、庁内の評価組織で内部評価をしようという庁内評価の形に変わっています。いずれにしても、数値などについては常に求められていると思います。

委員 数値はいつも苦しむところだと思いますが、数値のほかに、例えば研究員の仕事のPRを広報・新聞など、表に出して宣伝して、そのカウントも場合によっては必要なのかなと思います。いろいろ大変でしょうが、そういう意味での切り口も必要かなと思います。博物館の事業を見ていると結構大変な仕事を少人数でされていて、なかなか大変だと思います。研究員が広報まで携わるのは難しいかなと思いますので、事務方でうまく心がけていただくと、評価基準もまたちょっと変わってくるのかなと思います。

事務局 確かにアピールが下手だという気はします。いろいろなツールを積極的に活用しなさいよ、というご意見もいただいています。避けて通れない問題ですので、いろいろな形を探っていかなければならないと認識しています。

事務局 こちらからうかがってよろしいのかどうか。最近、大学や研究所でも、授業一つとっても、目標設定、成果報告ということが進んでいるとうかがっていますが、先生方は今、どういったことを評価項目にされているのか、例えば試験を行って、その点数の合計がそういうものになっていくのか、もし差し障りがない範囲で教えていただければと思います。

委員 私は県の研究機関で今も共同研究をしていますが、それなりのお金を使ったものについては事業効果の検証を必ず行わなければいけないと思います。研究員も当然そういうつもりでやっています。事業所も、行った事業に対して必ずどういう効果があるのかということを検証して広報で発表していく、というのが一つの流れになっています。勝手に自分で研究テーマを取って行う、というのではなくて、事業に付くお金に対する責任をそれぞれが持っています。それはますます厳しくなっていますから、当然、自分の仕事はどういう結果でどういう効果があったか、プラスマイナスを含めて明らかにしていく、というのが一つの流れになっています。おそらくどこでも同じだと思います。大学の授業は今点数をつけていないから良く分からないので、そちらは先生のほうから。

委員 とにかく厳しいです。例えば論文ですと、昔、民博の梅棹忠夫さんが費用対効果で、1本あたりいくらかかっているかというのを全部換算して評価の対象にしたということがありましたが、これは要するに本数ですよ。質ではないのです。誰が見ても合理的な説明ができるような評価基準を必ず設けなければいけないということが、どこでもあります。私の場合、授業も、年に、個々の授業に対する学生からの評価というものを、これから回数を増やすらしいのですが、数値化して外部に示せるような形にしています。それもアンケートを取るだけではなくて、それをどう改善したかをさらに数値で見せられる形にすることが求められます。ですから、数値化するということは、それをとにかく良くするというのも見せていかなければならないということで、これはまた大変なことなのです。私は授業だけでなく、生涯学習の仕事にも関わっていますが、それは、

参加者数や年間何本行っているか、同じ本数でも大学の特色を生かすものを設定しているかなど、内容が分からない外部の人でも説得できるような評価基準を必ず設けなければなりません。ですから、逆にそれを日々頭に置いて注意しながら事業計画を立てるようにしています。この傾向は年々厳しくなっていて、「そうは言っても、やはり人に数値で示せないような内容もあるんだ」といくら口で言っても、これは全く駄目にして、万人を説得できるような評価基準というのは必ず考えておかなければいけないことかなと思います。これは時代の流れではないかと。

事務局 正直なところ、その評価と改善という評価システムの運用にかかるコストというの馬鹿にはならないと思うのです。そこは果たして勘案されているのかどうか、時々疑問に思うことがあります。

委員 そうですね。

委員 文化をどのように評価して数字で出すかは、非常に難しいと思います。仕分けなど、世の中が厳しくなっているのは分かりますが、最終的に、博物館の行事が平塚市民に対してどれだけ効果があったかを数字に出せということで、文化を数字で出すのは非常に難しいと思います。それは時代的に仕方がないことで、例えば今回の特別展も、興味のある人と無い人と、大きな幅がありますよね。それを全体的に平均にやるのは、ジャンルによっていろいろあって、学芸員さんが苦勞されているように、非常に難しい話です。いかに平塚市民に小さい時から文化を植え付けてあげるかということも数字で表せというのは、結局、何人が集まりましたとか、人気がありましたとか、そういう数値になりますよね。これから中身を追求して、アンケートなどいろいろやってみようと思いますが、やっつけ方の方はすごく難しいだろうなと思います。市民を啓発しながら育てていくということを地道にやる、非常に地味な仕事を、時間をかけてやるということで、さっと終わる話ではないですから、その辺の難しいところは我々も分かっていますので、ぜひ努力していただきたいと思います。

委員 一方で、大学教員や博物館の学芸員さんというのは、外部評価のセンスに欠けたところがあるかもしれません。外から見た時にどう見られるかということも日頃考えずに自分の研究に打ち込むところがあって、その辺のセンスは持ったほうが良いと思います。そういうところとまともにぶつかるとうまくいかない場合が多いので、外から見てもったいないなと思うところがあります。前にお話ししたかもしれませんが、大阪市で10億円をかけて復元した菱垣廻船を、費用対効果がなくてということで博物館を閉鎖してしまって、朽ち果てる一方なのですが、ものすごく大事な資料で、研究者はこぞって署名活動などをしたりするのですが、そういう声と、行政の声・市民の声とはすごくズレがあるのです。ですから、そういう時の説得の仕方について、学芸員さんや私たちはセンスを鍛えておかないといけないと日頃から思っています。

事務局 大変貴重なお話をありがとうございました。博物館の場合、長く活動してきて、こういう企画をやれば人が来るはずだなというノウハウはある程度持っているわけですが、必ずしも博物館がしなければならないこと、という観点では、人が来るものばかりやるわけにいかない、人が来ないけれども、これは教育のために必要だという視点から企画をしていかなければならない、というのも使命だと思っています。今、PRのことやセンスのことなど、大変参考になるお話をうかがうことができましたので、勉強しながら、博物館の使命を守りながら、評価のことも気にかけてやっていきたいと考えています。どうもありがとうございました。

議題(2)「今後の事業予定等」で、次期特別展について、事務局栗山学芸担当長から協議会説明資料により説明。

委員 実物に触れる機会ということで、先の点検評価のアドバイザーのご意見に早速応える形になって非常に良いことだと思います。

委員 これは現物に触らせるという展示でしょうか。

事務局 中には、展示解説の時に触ってもらうこともあり得るかもしれませんが、置いておいて自由に触れるというのは、資料の場合は難しいかもしれませんね。

委員 資料保存上、やはり問題ですね。

議題(3)「その他」

屋上の防水工事修繕料の補正予算計上について、事務局縣管理担当長から説明報告。

【質疑応答】無し

議題(3)「その他」

事務局により次回日程の調整。次回日程は3月28日(金)10時開催を予定。

以上